身体的にアクティブな女性におけるスポーツとジェンダー認識

Sports and Gender Cognition in Physically Active Women

1K08B006-3　浅川　郁
主査 中村千秋 先生　　副査　松井泰二　先生

【緒言】

私は、2011 年度に中村千秋ゼミの課題として『スポーツと恋愛ー男女の性差に注目してー』というタイトルで調査研究を行った。その研究からスポーツと恋愛の関係性を男女の性差に注目して考えた場合、個人差が大きいので一つの定義を導き出すことは困難であるが、スポーツと恋愛の関係性について女性はネガティブに男性はポジティブに捉える傾向にあるという事が示唆された。

スポーツは基本的に古来‘男性のもの’として扱われていたこと、また‘女性が出世欲が強い、または自己顕示欲が強いと周りからの好感度が下がる’といった先行研究から推測するに、女性がスポーツと恋愛に対して男性よりもネガティブに捉えるのは、ジェンダー認識に関わりがあると考えられる。

そこで本研究では、身体的にアクティブな女性においてスポーツと恋愛の関係が、ジェンダー認識の中でネガティブに捉えられるという仮説を証明することを目的とした。

【方法】

本研究の調査対象は、早稲田大学のスポーツ科学部の学生及び体育会各部の選手のべ 295 名(男性 182 名:平均 20.4 歳、女性 113 名:平均 20.4 歳)であった。このことから本研究の対象者を「身体的にアクティブな学生」と定義した。

本研究の調査には質問紙法を用いた。計 26 問の質問を 5 つのカテゴリーにわけたものを用意した。自分の考えを選択肢の中から選ぶものと、記述してもらうものを制限時間を設けずに回答するように指示した。回答の上で必要となる情報は全てアンケート用紙に記載されているため、口頭での説明は行わなかった。

アンケートのタイトルは「スポーツと恋愛」とし、この調査の本来の目的がスポーツとジェンダーにあることは調査対象には伝えなかった。これは、ジェンダーと銘打ってしまうことで、回答者個人の意見ではなく、ジェンダー規範にそった模範的な回答が増えてしまう可能性を排除したかったためである。

【結果・考察】

スポーツと恋愛について尋ねた質問に関しては、前回研究と同じく女性のほうがスポーツと恋愛の関係をネガティブ(恋愛相手を意識することはスポーツの妨げになる、一方に集中するためには一方を自粛する)に捉えているという結果になった。

ジェンダー認識の中で、女性は上昇志向を誇示することよりも、謙遜や奥ゆかしさを期待されることや、スポーツや筋肉＝男らしさといったジェンダー認識が人々の中にあると仮定した。そのため「自分がスポーツで成功した時、異性の反応をみるのが楽しみである」「自分が恋愛相手よりもスポーツの成績が良いことに優越感や安堵(プラスイメージ)をもつ」などといった、自身のスポーツ経験を異性に誇示するかどうかを問う問いに対して、女性は「いいえ」を答え、男性は「はい」を答えるだろうと予測した。結果、予測通り女性のほうが「いいえ」と答えがちであった。

成功と好感度は男性の場合は正比例し、女性の場合には反比例するという先行研究をスポーツに応用すると、スポーツに対して貪欲に取り組み、良い成績を収めた男性への好感度はあがるが、同じように努力し良い成績を収めたとしても女性に対しての好感度は男性のようにはあがらないと考えられる。

プロになれるならばなりたいと答えた割合も女性は男性よりも少なく、男性は外で働き、女性は家事と子育てを行うといったジェンダー意識に根付いた考え方を理由にするものが多かった。

スポーツを行っていく中で‘異性に生まれたかった’と思ったことがあるかという質問に「はい」と答えたのは女性 74.3%、男性 8.8%であった。スポーツ＝男のものといった意識があることや、男性はスポーツを通して筋肉質な身体や日に焼けた肌など‘男らしさ’といわれるものを得られるが、女性はスポーツを通して‘女性らしさ’と言われるものは得られにいということ、女性はスポーツのパフォーマンスよりも容姿に注目されやすい事など『スポーツ、筋肉＝男らしさ』といったジェンダー認識を意識したと思われる言及が多く見られた。

【結論】

身体的にアクティブな女性においてスポーツと恋愛の関係は、ジェンダー認識の中でネガティブに捉えられている。